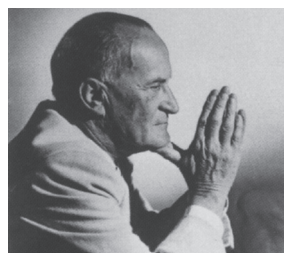


## 神秘的自然主義建築家

## アントニン・レーモンドの原象

## ー流浪(ディアスポラ)するコスモポリタンー

松野高久(建築家)



アントニン・レーモンド(1888-1976年)  
(Raymond in the early 1950s)

数年前にレーモンド設計事務所の若き日からの友人である土屋重文氏から、チェコのプラハ市の北西方25キロにある小都市のクラドノにあるレーモンドが誕生し生活した建物の写真をいただき、レーモンドがユダヤ人であることの研究資料について教示を受けていた。確かに私も当事務所に在職中から所員の中でその種の噂は耳にしていた。私自身も若き頃当時から、休日の土曜日に事務所内で只一人出勤して図面を描いていると、レーモンドがアトリエから事務所に入ってきて、ブランデーの酒杯を手にして私の机の傍らに立ち、「さあ、家に帰りなさい。母親や家族と共に過ごしなさい」とアドバイスを受けたことを今でも鮮明に記憶している。多くのレーモンドの著作のある三沢浩も同じことを記録しているが、その曜日まで書いておらず、それをアメリカ的としているが適性ではない。入所数年後の私は当時よくわかっていなかったが、ユダヤ人社会には「安息日」、つまりシャバットというのがある。それは金曜日の夜から土曜日の夜にかけては仕事をしない、ペンすら持たないし、シナゴークへ行く他は在宅するという習慣で、私はこの習慣を後に知ることになり、あの日のことをやはりと理解できる事務所時代の経験もあった。

土屋との会話の中で知り得たこと、そして、彼のレーモンドの出生の謎についての研究資料を基に、私はレーモンドの建築の原像を探す作業に着手した。

## 1. 『自伝アントニン・レーモンド』

『自伝アントニン・レーモンド』(1970年 鹿島研究所出版会)の訳者の三沢浩は、『アントニン・レーモンドの建築』の中で、

第一次大戦末期にチェコ軍はドイツに侵攻し、終戦の1918年には、チェコスロバキアとしてオーストリア・ハンガリーから独立。しかし、その恨みをかってか、30年代にはドイツは次第にチェコスロバキアを併合しようとする。1938年にヒトラーは先にオーストリアを併合、チェコ粉砕のための秘密指令が出され、そして翌年にはドイツ軍はチェコに侵入し、戦乱の地となった。その結果、レーモンドの父と姉二人は行方不明、弟フランクはオーストリア騎兵として戦争中に行方不明。弁護士の子弟ビクターはスウェーデンへ逃れる途中で殺され、末弟エゴンはユダヤ人をかくまった罪で銃殺されたという。

三沢は、レーモンドがユダヤ人であるとは言及していないが、同書でそれを匂わせていることは感じられる。三沢はその点に

関しては、あまり対象にはなかった。確かに『自伝アントニン・レーモンド』には、自分の出生に関しては、本人はチェコ人でスラブ系であるとしている。確かにその通りである。

レーモンドはアントニン・レーマンとして母のルジーナと父アロイ・レーマンとの間に長男として生まれた。母は農民の血筋を引くチェコ人と書いているが、「父方のことは出生地がフーリエトヴィチェであること以外は知らない」とだけ書いている。つまりそれ以上は書けなかったのである。父はユダヤ人であったからである。(図1)

建築史家の藤森照信氏は、クラドノに少年時代のレーモンドのいた家を探り当てようと探訪する。そして、大戦中にアメリカで、レーモンドが好きだったに違いない日本の町を焼き払う計画「プレファブ・ターゲット」に加わった気持ちについては、これまで計りかねていた。その謎は、クラドノの町のそこだけ寂しい一角を眺めている時に解けるように思えた」と書いている。

さらに藤森は、「彼が、アメリカで日本への空襲計画に参加している時、頭にあったのはナチスドイツによって消息不明となった兄弟たちのことであつたに違いないし、そのドイツと手を組む軍国日本をたたくことによってしか、自分たちユダヤ人は救われない、と考えていたのではないかと思う。アインシュタインが原爆開発に加わったのと同じ気持ちだったに違いない」と書いているが、土屋は、「ドイツには積年の怨根の念があったことは確かですが、日本への敵意は全くないと思います。レーモンドは日本を〈永住の地〉と考えていた筈です。なぜなら関東大震災を経験した直後にコンクリートの自邸と別荘を建て、愛弟子の吉村順三をはじめとした、多くの知人・友人がいる日本を敵対視することは、絶対に無いと考えます。そうではなく〈原爆の使用〉を避けるためには、何が有効かを、真剣に考え抜き、できるだけ被害の少ない木造建物が対象の焼夷弾を考えさせたことに真実性があります。なので、レーモンドはチェコ人としての自覚はあるもののユダヤ人としての意識はないし、ユダヤ人を救う等の感覚は全くないと思います」という。

土屋は日本への敵意を全く否定している。三沢浩は自著にこの藤森の部分引用している。それは、三沢が訳した『自伝アントニン・レーモンド』には、自身がユダヤ人である表現部分は全くないからである。その「1. 幼なき日」には、

私は1888年5月10日、農民の血筋を引く父のアロイと母のルジーナ・レーマンの間に生まれた。祖父のアブラハム・レー



図1 私の両親(出典:『自伝』)



図2 クラドノ生家跡、現在は銀行の建物。(提供 土屋重文氏)



図3 クラドノ市のレーモンドの生家(提供 土屋重文氏)



図4 左:土屋重文 中:自子、クロードの妻 右:クロードの娘(レーモンドの孫) 銀行入口前にて(提供 土屋重文氏)



図5 クラドノ中央広場の生家跡地の銀行入口。銘板「レーモンド生家あり」(提供 土屋重文氏)

マンについては記憶はさだかではないが、姓の綴りRajmanについては何ともパズルめいたものがあった。のちに私がアメリカに渡ってからわかったのだが、人びとはその姓のjをzhのように発音し、チェコ語で実際に発音するjと同じようなyではなかった。私はラジマンのようによばれるのに耐えられず、アメリカ市民権の申請の際に、現在の綴りのレーモンドに変えた。

土屋はそのRajmanこそユダヤ人の証であるとする。レーモンドのクラドノの生家跡等については土屋から写真の提供を受けた。(図2,3,4,5)「クラドノの家は醜悪な2階建てで街の中央広場の角に面していた。その東側には共同井戸があり、保険会社の建物があった。1階は2つの店に分かれ、1軒は鉄製品、もう1軒では衣類を町や周辺の田舎の人びとに売っていた。店の地下には私たちの家族用の地下室があった。砂の中に野菜を、樽の中にはワインを貯蔵していた」という。この2階の3LDKに一家8人が住んでいた。藤森もこの家を訪ねたのだが、「一家の住んでいた2階建ての雑貨屋を、塔のある3階建てとまちがえている」と、三沢は書いている。レーモンドはクラドノの街の家々を詳説している。レーモンドは続けて、10歳のある日、

母の葬儀は、当時のヨーロッパのカトリックで行われていた綿密な宗教行事に従った。私の家の車庫のような入り口に置かれた置台にその棺が安置され、隣人たちの長い列と、たくさんの親族の列が流れて行った。

レーモンド家はカトリック教徒であった。

## 2. 「同化ユダヤ人」-マネラン

イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』(1971年 角川書店)の第1章「安全と自由と水のコスト」の「内なるゲットーと外なるゲットー」には、ゲットーとはヨーロッパの都市で、ユダヤ人が強制的に居住を指定された区域のこととあり、レーモンド一家が居住していたプラハ地区にはゲットーがあったので、一時、レーモンド事務所の所員の間で、レーモンドはそこに住むユダヤ人であるとの噂も既に口にされていた。

それはユダヤ人国家の父、テオドル・ヘルツェルにより、「内なるゲットーと外なるゲットー」と言われた。ベンダサンは、

こういう見方は古くからユダヤ人の間にあった。というのは、ちょうど隠れ切支丹(キリシタン)と同じ隠れユダヤ人が、中世には実に多くいたからである。彼らはマネランといわれ、宗教的迫害の強かったスペインでは特に多かった。かく言う私(註:イザヤ・ベンダサン)もマネランの子孫であるから、その実態はよく知っている。彼らは、何代にもわたって、あくまで敬虔なカトリック教徒として振舞う。自分の精神を黒幕でつつみ、そこに大きくカトリック教徒と書いて生きているわけである。嘘か本当か知らないが、カトリックのさる有名な聖人は、実はマネランなのだそうである。こういうことがあっても別に不思議ではない。身の安全を考えれば、彼らは、どのカトリック教徒よりもカトリック教徒らしく振舞わなければならない。少しの嫌疑もうけないためには教会や僧院に多額の寄附をしなければならない。

そして、もし「ばれた時のお仕置は、隠れ切支丹が受けたお仕置よりもっとひどい」だから、「何もかも放り出して逃亡しなければならない。ある者は〈死ぬなら故国で〉とパレスチナに逃れ、またある人々は〈地中海のニューヨーク〉のヴェネツィアに逃れた」と、歴史的に書いている。ヴェネツィアには世界で最初のゲットー居住区がある。レーモンドの場合には、フランスへ逃れ、またイタリアへ、またニューヨークへ逃れたのである。つまり、「ディアスポラ」(離散したユダヤ人)なのであるとしても、日本でも多くの各派のキリスト教会の設計を行っている。

土屋もレーモンドは「マネラン」であったと私に教えてくれた。レーモンドは母親について『自伝』で、

母は旧姓をトウジグといい、私はそれに関心をもっていた。のちにわかったことなのだが、アメリカには沢山のトウジグ姓があり、ある人びとは間違いなくチェコ人を祖先としている。第二次世界大戦で有名なアメリカ海軍のトウジグ司令官の名前によって、私はいつも好奇心をそそられていた。トウジグはボヘミアの都市の名であるから、彼はチェコを祖先にもつに違いない。

レーモンドの母が「マネラン」でないことを証言するが如くに記録しているのも異常であった。逆に、ユダヤ人ではなく在来からのチェコ人であることを強調しているからである。父については、例の「Rajman」と書いている。レーモンドは別書で、父

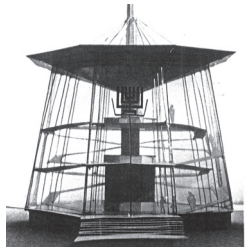


図6 EXPO'70のためのイスラエル館の模型(出典:「自伝」)

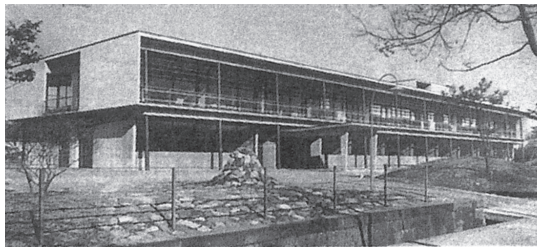


図7-A RD社外観(出典:「A・レーモンドの建築詳細」三沢浩 著/彰国社/2005年)

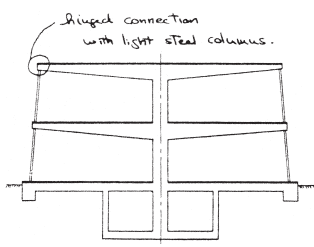


図7-B(出典:「建築雑誌」/1952年8月号)



図8 聖ポール外観(出典:「自伝」)

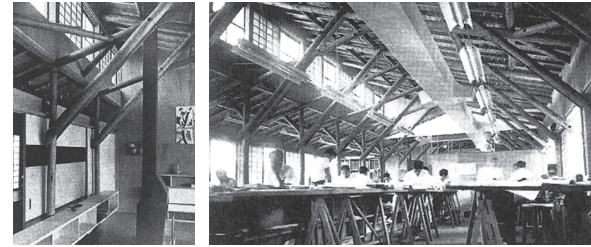


図9-A(左)「斧町の自邸」居間北側の鉄状トラス(出典:「建築文化」/1952年11月号)  
図9-B(右)「斧町のレーモンド事務所」製図室の内部(出典:「建築文化」/1952年11月号)

はブルジョアの出で、母は農家の出であると書いている。

そしてノエミ夫人は、レーモンドがイタリアのナポリから避難民をのせてニューヨークへ行く船の中で出会っている。ノエミ・ペルネッサンはカンヌ生まれのフランス人であった。

『自伝アントニン・レーモンド』の「23. 教会、学校、その他」に、「万国博イスラエル館」(1969年) (図6)について書かれている。

流浪の民であるイスラエル人は、主要構造計画でもある中心軸に吊られた天幕によって象徴された。三層の床は相対しておかれる。二つの組み合わされた螺旋形の斜路によってつながっている。壁は一部分プラスチック、一部分は鏡であるが、この鏡は強い日光を反射するためにおかれる。そのうち一層は日本におけるユダヤ人の歴史を描く展示場になる予定である。(傍線筆者)

イスラエル政府が、レーモンドにそのEXPO'70万国博館の設計を依頼したことも当然とも言える。レーモンドはユダヤの砂漠の「天幕」を意識していたことが伺える。そしてその展示場には、もしその建物が実現していたら、レーモンドもその歴史の一員となる可能性もあったのではないか。

私はレーモンド事務所に在職していた時、計画案の設計作業を目にしていたが、「天幕」が主要構造であることには気づかなかった。そのように考えると、レーモンドが設計した「リーダーズ・ダイジェストRD東京支社」(図7-A,B)もこの天幕構造の一種である。

土屋は、レーモンドの祖父の名はAbraham Reimann (1823-1871) で旧約聖書に出てくる民族の始祖のアブラハムと同じ名であるから、ユダヤ人としての誇りは持っていたはずであるが、「改革派ユダヤ教徒」だったので、プラハに移り住んだ家はゲッターではなかったと私に話した。

『藤森照信の建築探偵放浪記』(2018年 経済調査会)の「10. 聖パウロカトリック教会一日欧の伝統と技術の融合」の「木造教会の謎は宗教観によるものか」には、クラドノの街を訪れた見聞から、レーモンドのユダヤ人説を検証している。藤森は、

レーモンド事務所の秘書の方から“全くそんな風はなかった”と批判されたことがある。その後、この問題は宙吊りにしていたが、一番最近のチェコ訪問の折、この点を問うと、向こうの建築関係者が微笑みながら、近年、チェコで開かれたレーモンド展のカタログを見せてくれた。その表紙には、「あるユダヤ人一家の歩んだ道」との副題が付き、ユダヤ人としての

一家の苦難の経歴(レーモンドのすべての兄弟はナチスの時代に殺されている)と、ユダヤ原理主義からの脱却を目指す改革派ユダヤ教一家としての道が記録されていた。

レーモンドは、脱原理主義のユダヤ教徒として出発したが、おそらく、アメリカに渡ってから、もしくは更に来日してから、無宗教に近いような心情に至っていたのではないか。レーモンドの『自伝』を訳した三沢浩さんに伺うと、ノエミ夫人も「夫の宗教の姿勢は謎だった」と、述べられたという。長年連れ添った夫人にも分からない状況だったのである。(傍線筆者)

これは「レーモンド展」の小冊子(2015年)は土屋から借用したもので、このレーモンドの秘書は後に五代信作氏の夫人となる五代美子さんである。“全くそんな風はなかった”というがそれは当然のような回答である。また、ノエミ夫人の返答も、充分真実を知っているのであるが、そのようにしか答えられなかったのである。当然であるが三沢もそれに何故思い至らなかったのか。ただ重要な藤森の傍線部の記述は検討に値する。レーモンドは確かに「改革派ユダヤ教」であった。しかし、「脱原理主義のユダヤ教徒」という表現は、よく調べなければならないが、レーモンドの「内在的必然性」である。「改革派ユダヤ教」も同様である。それと「ディアスポラ」のユダヤ人であったこともある。それはある意味でのキリスト教のことか。

「改革派ユダヤ教」とは、19世紀のはじめドイツに起こりイギリス、アメリカ等の地域に及んだユダヤ教の流派で、絶えず変革を唱え、慣習の簡素化や大きな再解釈を試み、「ディアスポラ」の立場をとることが多い。シナゴグの礼拝においてキリスト教の教会の要素を取り入れて、「ディアスポラ」(離散)の地における言語の祈りを取り入れた。イスラエルでは正統派以外の公的活動は認められていない。ユダヤ人固有の文化を捨て、ヨーロッパの世俗文化を学ぶことが、中世以来の社会的差別からユダヤ人を解放する前提であると考えた。レーモンドは「ディアスポラ」であった。

藤森は続けて、軽井沢の「聖パウロカトリック教会」(図8)について、「丸太を剥き出した空間の力強さと素朴さと嘘の無さ、こうしたあたりが建築家としての狙いだった。2年前の1933年に名作〈レーモンド夏の家〉を完成させ、木造モダニズムの道を切り拓いた建築家として、木造の新しい構造的可能性の実験としてみたかったのではないか」と書いているが、レーモンドは木造であろうと「モダニズム」建築を作ろうとしたのではないかと書いている。しかし、レーモンドは「モダニズム」の建築家ではない。

ここに実現した木造を日本人が見れば、トラスによる小屋組みからして日本風ではないと思うし、欧米人の眼には小屋組みの丸太の使用からして欧米とは違うと映る。小屋組みを使う伝統は白川郷の署名にある。丸太の小屋組みのモダンな魅力をレーモンドは吉村順三の担当した「赤星別邸」(1931年)で初めて知り、さらに「夏の家」で確認していた。レーモンドは“日本建築のモダンな魅力を日本の建築家に教えたのは私だ”と常々言っていたが、吉村は“赤星邸で私がレーモンドに教えた”と語っている。

日本の伝統の丸太の小屋組みを、ヨーロッパの教会の“鉄状(シザーズ)トラス”構造でやる、という日欧の合わせ技により、レーモンドは実験に成功したのだった。

後述するが、トラスは日本伝統の小屋組みではないが、チェコの教会建築の梁材として丸太が使われている。石造の「プラハ城」も最初は農家のような木造で合掌造りであったり、丸太を横に寝かせて積み上げる今でいうログハウス(丸太小屋)であり、「プラーク」という地名はログハウスなどの丸太をさしていたのだろうか。

### 3. A・レーモンドのデザインの原像を求めて-「内在的必然性」

私は、レーモンド設計事務所に所属している間も、また退所してからも、各種の様式の建築作品を設計したレーモンドという建築家のオリジナリティ(原像)がどこにあったのか、「レーモンド・スタイル」としても客観的に全く想像もできなかった。

フォイエルシュタイン、オーギュスト・ペレー、フランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジエ等の建築家から、そしてデ・ステイル派とその受けた影響は多様であったが、それはあくまで「外在的必然性」であったといえる。レーモンド本人の持っている、いわゆる「内在的必然性」については全く不明であった。当然、日本の建築もその主たる「外在的必然性」であった。

麻布斧町にあった「自邸(アトリエ)+事務所」は所内で「レーモンド・スタイル」と呼ばれていて、何となくそのデザインの傾向は分かったつもりでいたが、現実には、日々そのオフィスで暮らしながら「日本建築らしさ」を感じることはついに無かった。所内を歩いていても、また製図板の前に座り、図面を描きながら天井を眺め障子窓を通して外部を見ても、あるいはレーモンドのアトリエから庭に出てプールの傍らでふり返ってレーモンドのアトリエと住居部分を見ても、全く「日本建築らしさ」を感じることはなかった。もし、レーモンドの建築に「日本らしさ」があるとすれば、木造であるが構造材のシザーズ(鉄状)トラスの丸太で、仕上げは土壁ではなくラワンベニヤ貼りであった。建具に障子や襖を使い、引違い戸や

#### 執筆者プロフィール

松野 高久(まつの・たかひさ)  
1944年東京都浅草に生まれる。1968年東京工業大学理工学部建築学科(清家研究室)卒業。同年、株式会社レーモンド建築設計事務所入所。建築設計の傍ら1997年第1回長塚節文学賞・最優秀賞「矢を負ひて斃れし白き鹿人―長塚節臨死歌考」を受賞。1993~96年日本工業大学建築学科非常勤講師。「長塚節研究会」の常任理事。2005年株式会社環境デザイン研究所入所。  
主な著書に『ロゴスの建築家 清家清の「私の家」そして家族愛』(明文社 2018年)がある。2021年に谷口吉郎建築論を出版予定。

窓であっても芯出し工法でそれは洋風建築であった。(図9-A,B)

私の家は、下町の大工であった父が建てた家で、新・旧共に日本建築であったから、現実的な木造住宅の実感とは生活感覚としてあった。単に、レーモンドの住宅が木造であることは、日本人がその図面を描き、日本人の大工が建設したことによる「日本らしさ」であった。しかし、それがレーモンド建築の原則、オリジナリティとは思えなかった。あれ程、西欧からアメリカへと建築生活してきた人が、日本でその美を発見したからといって、それは設計する際のオリジナリティ(原像)には決してなり得ないのである。

私がもしアメリカで建築作品を設計する場合でも、日本人としての「日本建築らしさ」は少しは表出されるだろう。例えば谷口吉生氏が米国のハーバード大学で学び、「ニューヨーク近代美術館」(2004年)の設計をした際にも、「日本らしさ」は漂っている。従って、私はレーモンドのその「内在的必然性」としての「原像」を出生、生活した郷里のチェコの歴史、風土、古代からの建築そして血脈から模索しようとしていた。

その発端となったのは、レーモンド事務所の後輩で、父の重隆氏と共に二代目として事務所に所属し、レーモンドの下で直接、設計担当者として携わった経験のある土屋重文が行った、レーモンドがユダヤ人であることを探るチェコのクラドノの生誕地での調査・研究であった。それまで所員の間では、ユダヤ人であることは噂として口にされてはいた。ある役員がチェコまで行き調査した時も、ゲッターに住んでいたからユダヤ人であるという同じ感想を得て帰国していた。レーモンド事務所員は、その実際の原像を知りたがっていた。

レーモンドの死後、私は外務省からイスラエルのテルアビブに、日本大使館公邸の設計業務を委託され、現地の大使館員の案内でイスラエルの各地の案内していただいた。北は地中海に面する海港のカイザリアから南はヨルダン河流域の「ユダの荒野」のベツレヘムから死海まで、その旅でユダヤ人はパレスチナ砂漠の民であったことを知った。

しかし現実には、エルサレムでは冬期には雪が降ることも、ユダヤ人が世界各地に離散して「ディアスポラ」になったその地に融合できることも、その気候の多様性の経験であることも知った。

そして本論を執筆するにあたり、東工大の八木幸二名誉教授に専門であるアラブの建築についての多くの示唆を受けた。しかし、八木は、ユダヤ人の建築論にアラブの建築を適用することに対する疑問を受けていた。私は、同じ砂漠の民の建築、風土としての物理的に両建築を考察して、レーモンドの原像に迫りたい。(続く)